

次に、よく新聞でたかかっている養豚について計算してみよう。霞ヶ浦の流域には一九万頭の豚がいる。そのうち霞ヶ浦に流入する主要河川両岸及び湖岸の集落地の養豚数は六八〇〇〇頭で、そのうちの一〇〇〇〇頭は直接川にタレ流しにされている。豚は一日約三Kgの尿と三Kgの糞をするから全流域では実に二七〇〇トン、一年の窒素分が出ていることになるが、河川沿い及び湖岸の養豚を除いた十二万五千頭分の糞尿は全部山林や畑に還元されている。霞ヶ浦を汚染していないと仮定すると（実際

そんなはずはないが）窒素分は三二〇トン一年となる。この辺が数字の統計的扱いのむずかしいところで、さらに研究しなくてはならないところである。

さて、次に私たち家庭の下水やし尿についてであるが流域五七万人、十二万七千世帯の家庭下水はほとんどがタレ流しである。し尿については二十二万人分が未処理で三十五万人分がバキュームカーで運ばれ、し尿処理場で処理されている。「処理される」といっても実際は固形物、有機物が分解されるだけで、霞ヶ浦の富栄養化の大部分である窒素分やリン酸はほとんど減ることなく、川、

部川、小野川に放流され霞ヶ浦に入ってきているのである。家庭からの下水と、し尿の窒素分は年間一五〇〇トンにもなる。つまり農業とやらんで下水、し尿は霞ヶ浦汚染の筆頭といえる。

最後に工場排水の窒素についてであるが、工場関係のデータはなかなか入手が困難で、その上いろいろと秘匿事項が多くて計算がむずかしいが、窒素分は約三〇トン位を流出していると推定される。意外に低い数値である。窒素分に関しては工場関係はそれほど公害の元凶ではないわけだ。以上述べた窒素分についてはまとめると、少く見積っても実に三千三百トン位の窒素分が霞ヶ浦に流れ込み富栄養化、ひいては霞ヶ浦のドブ沼化につながる原因をつくっている。

同様にリン酸やBODの負荷量についても計算できる。ここでは、こまかいことは省略して汚染ぶりをそれぞれ順位でのべてみよう。リン酸では工場排水が霞ヶ浦を汚している筆頭である。次いで養豚、家庭の下水、し尿の順で、合計年間一万三千五百トン位と計算される。ここでは肥料による汚染はほとんどゼロであるが、工場排水